慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本の「三国志」受容における「合理性」とキャラクターの再構築について：吉川英治・柴田錬三郎・陳舜臣・三好徹・北方謙三・宮城谷昌光の描く陳宮像
Sub Title	On 'rationality' and character reconstruction in the reception of the 'Sanguozhi' in contemporary Japan. : the image of Chen Gong by Eiji Yoshikawa, Renzaburo Shibata, Shunshin Chen, Toru Miyoshi, Kenzo Kitakata and Masamitsu Miyagitani
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.2 (2022. 12) ,p.79 (178)- 97 (160)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高橋智教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本の「三国志」受容における「合理性」とキャラクターの再構築について

――吉川英治・柴田錬三郎・陳舜臣・三好徹・北方謙三・宮城谷昌光の描く陳宮像――

吉永　壮介

一、序言

中国古典文芸の領域を超えて、現代日本のサブカルチャーにおいても「三国志」はメディアミックスの巨大コンテンツを形成している。間断無き受容と再生産には、各分野の制作者に固有のモチベーション、あるいは共通する事情が存するであろう。その膨大な全貌を網羅的に把握し続けることは困難であるが、本稿では現代日本の長編小説を対象として、「三国志」の物語が再生産され続ける要因の一端について考察する。

小説作品を論じるにあたり、主題、プロット、文体、キャラクター、史実と虚構、古典性と現代性、作家論等、アプローチによって浮かび上がる諸相は異なる。本稿では、サブキャラクター像の形成という観点から陳宮という人物に着目する。『三国志演義』における陳宮像は、大枠において正史『三国志』とも一致する。忠誠心と知謀を有しながら、なにゆえ曹操から離反して呂布を主君に選び、最後は傲然と死途に就いたのか。陳宮の生き様の不整合性は、膨大な登場人物群のなかで異色であり、古来多くの読者の感興を誘い、また不審の念も抱かせてきた。

陸続と新たな作品が市場に問われるには、先行作品との差異化がその前提となろう。以下、吉川英治、柴田錬三郎、陳舜臣、三好徹、北方謙三、宮城谷昌光の諸作家が「三国志」の長編小説をリライトするにあたり、先行作品の陳宮像に感じたであろう違和感、換言すれば、陳宮像を支える合理性の陥穽への疑念が、新たなキャラクター造形の動機をなしたであろう点について考察する。

二、正史『三国志』、『三国志演義』に見える陳宮像

まず陳寿の正史『三国志』（以下『三国志』と記す）の陳宮の事績を概観したうえで、『三国志演義』（以下『演義』と略し、特に明記しない場合は毛宗崗本を指す）の陳宮像と照合する。

『三国志』には陳宮は立伝されておらず、武帝紀、呂布伝、荀彧伝、程昱伝等の記載を紡ぎあわせて事績を確認する必要がある。『三国志』武帝紀・裴松之注引『世語』には、兗州刺史・劉岱の戦死を受けて、陳宮が曹操に兗州を支配下におさめるよう進言した旨、また陳宮が兗州の別駕や治中を説得して鮑信らの賛同を得たことが記されている。[1] この間の動向について、渡邉義浩氏は「曹操の兗州支配は、兗州の「名士」である陳宮及び鮑信の規制力に依拠していた」と指摘する。[2] 劉岱が戦死した初平三年（一九二年）の時点では、陳宮は曹操を高く評価し、曹操を迎え入れることが兗州の利益とも一致すると考えていたことが分かる。しかし、徐州侵攻と民衆虐殺の争乱を経て、曹操は兗州の名士の支持を失った。ことに兗州の名士・辺譲を殺害したことが引き金となり、興平元年（一九四年）、陳宮は張邈とともに曹操に叛旗を翻し、呼応した呂布と合力して兗州を席巻した。『三国志』には、兗州の名士としての影響力を以て群雄の間を立ち回る陳宮の姿が描出されている。[3] 建安元年（一九六年）、郝萌が呂布に反乱を起こした際には、陳宮もその一味であると疑われたが、しかし陳宮が大将の身分であることから不問にされたことが『三国志』呂布伝・裴松之注引『英雄記』見える。[4] その後、袁術、劉備、曹操とのせめぎ合いの果てに呂布は滅ぼされ、曹操に捕われた陳宮は降伏よりも死を選んだ。

次いで、『演義』における陳宮像をたどる。陳宮が『演義』に初登場するのは第四回「廃漢帝陳留踐位 謀董賊孟徳獻刀」

である。[5] 董卓暗殺に失敗した曹操は中牟県で捕えられるが、県令・陳宮は曹操の漢王朝への忠義の志に感動し、曹操を都に送還することはせずに、大事をなすべく行動を共にする。呂伯奢一家を皆殺しにしたうえに、「私が天下の人に背こうとも、天下の人が私に背くようなことはさせぬ。[6]」と言い放つ曹操を見て、陳宮は曹操を殺害すべきか迷うが、「私は国のために彼についてここまで来たのだから、彼を殺すことは義に悖る。彼を見棄ててよそへ行った方がよい。[7]」と考えを変え、その場を離れて立ち去った（『演義』第五回）。

後に、曹操が父・曹嵩の仇討ちのため徐州に侵攻した際、東郡の従事であった陳宮は曹操のもとを訪れて民衆を虐殺せぬよう諫める。しかし曹操に、「貴公は昔、私を見棄てて去ったではないか。いまさら何の面目があって、またやって来て見えるのか[8]」と取り合ってもらえぬと、陳宮は陶謙に合わせる顔がないとして張邈のもとに身を寄せた。後に、陳宮は張邈と呂布を扇動して曹操に叛旗を翻させて兗州を攻め、一時は大いに曹操を追い詰めるが、曹操に敗れると劉備を頼って落ち延びる。やがて劉備から徐州を奪い取るが、陳宮の策を用いぬ呂布は曹操との戦いに敗れて、陳宮らとともに捕縛される。曹操に見苦しく命乞いをする呂布を尻目に、陳宮は残される老母と妻子の行く末を曹操に託して、自らは潔く死を選んだ（『演義』第十回～第十九回）。助けてくれた劉備から徐州を奪うよう呂布に勧め、最終的に呂布とともに死途に就く展開は、『三国志平話』もほぼ同様である。但し『三国志平話』では、陳宮が、自分の息子を生かしておけば後の禍の種となるので、母と妻だけは救って欲しいと申し出て、曹操はその言葉通りに陳宮と息子は殺したとする。『三国志平話』が陳宮の息子も殺されたとする意図は不明瞭であるが、あるいは『三国志』呂布伝に、曹操が陳宮に対して、老母と娘は生かしておいてやりたいかと尋ねる場面が見えることから、男児は斬られたのであろうと解釈したものかも知れない。[9]

『演義』の陳宮像を『三国志』と照合すると、曹操との出会いの場面においてすでに虚構が施されている。『三国志』武帝紀は、董卓は曹操を驍騎校尉に命じてともに事を謀ろうとしたが、曹操は姓名を変えて間道で東の郷里へと逃走する途中、中牟県を過ぎるときに亭長に疑われ、捕えられたと記す。そこには『演義』に見える董卓暗殺失敗の記載は無い。但し、「中牟県を過ぎるときに亭長に疑われ、捕えられて県に連行されたが、街に曹操のことを知る者がいて、頼み込んでくれた

おかげで釈放された。[10]」と見え、裴松之注引『世語』に、「中牟県の功曹が逃亡中の曹操であることに気づいたが、世の中が乱れており、天下の俊英を捕らえるべきではないと考えて、県令に進言して曹操を釈放させた。[11]」と見える。この功曹、あるいは県令が、『演義』のこの場面に登場する陳宮のモデルであろう。但し、石井仁氏が「功曹以下、県の役人には現地人があてられるので、陳宮の可能性は絶対にない。なぜなら、陳宮は「東郡の人」と伝えられているからだ。[12]」と指摘しており、中牟県での曹操と陳宮との顚末は、『演義』が後の曹操との確執への伏線として配置した虚構である。また呂伯奢一家殺害については、武帝紀・裴松之注引『魏書』『世語』『雑記』に見え、そのうちの『魏書』には数騎の供を引き連れていたことが記されているが、やはり陳宮の名は見えない。

『三国志』呂布伝・裴松之注引魚氏『典略』は、陳宮を剛直で壮烈な気質であると評している。[13]しかし、『三国志』の陳宮の事績を見るに、彼の名声の基盤は兗州に由来し、兗州における利害関係のただ中に身を置かざるをえなかったが故に、結果として激動する時勢を遠望する定見に乏しく右往左往する振る舞いが散見されることとなった。曹操の能力を評価しながらもすぐに離反し、主君としては曹操に劣ると思われる呂布を担ぎ上げ、その呂布をも裏切る計画に加担した節があり、しかし最後には潔く死途についた。陳宮がどのような人物であったのか見定めることを難しくさせる要素は、こうした混乱した事績を断片的に伝える『三国志』にすでに起因している。

『三国志』『演義』のいずれでも、呂布は裏切りを重ねる無思慮・無節操な武将という造形である。[14]その呂布に仕えたという選択は、大義という思想面、策士という能力面のいずれから言っても『演義』の陳宮の人物像と乖離する。『演義』で陳宮が曹操を見限る場面に、毛宗崗は「陳宮が曹操に随わなかったのは、人を見る目があるといえるであろう。しかしながら、後に呂布に従うことになるとは、まだ人を見る目が十分ではなかったようである。」という評を差し挟んでいる。[15]この毛宗崗評を俟つまでもなく、出処進退の整合性という観点から生じる陳宮の人物形象の不安定さは、少なからぬ読者に不審の念を生じさせ、その生の軌跡に歪つな関心を寄せさせるであろう。[16]

史実、そして物語上の陳宮の人生の不合理性という点に着目して、以下、現代日本の長編小説における陳宮像の受容と再

構築について考察する。

三、現代日本の長編小説における陳宮像

（一）吉川英治『三国志』の陳宮像

現代日本の「三国志」受容において、吉川英治（一八九二～一九六二）の長編小説『三国志』が大きな影響を与えたことは論を俟たない。吉川『三国志』が創作にあたって底本としたのが、毛宗崗本『演義』ではなく、江戸時代以来日本での「三国志」受容の主流であった李卓吾本『演義』であることはすでに多くの指摘がなされているが[17]、陳宮の人物像については李卓吾本と毛宗崗本に大きな差違は無いため、本稿では毛宗崗本との比較に基づいて論を進める。

吉川『三国志』で陳宮が登場するのは、中牟県で曹操が捕えられたくだりであり、呂伯奢一家殺害の顛末とあわせて『演義』を踏襲している（「偽忠狼心」）。但し、吉川『三国志』では、陳宮は逃亡の途中で曹操を見捨てず、曹操の郷里にともに落ち延び、打倒董卓の檄文をしたため、「彼は、心の底から国を憂えている真の志士である。その文は、読む者をして奮起せしめずにおかないものであった。」と評されている（「競う南風」）。呂伯奢一家殺害の直後に、「曹操には、曹操の人生観があり、陳宮にはまた、陳宮の道徳観がある。それは違うものであった。」という一節が差し挟まれていることからも、吉川が陳宮を「志士」として評価し、人格にまで踏み込んで曹操と対比的に人物像を造形しようとした意図が窺われる。

しかし、陳宮の登場はこの場面以降しばし途絶え、次に姿を見せるのは曹操の徐州侵攻の虐殺を諫める場面である。そこでは「陳宮は、かつて曹操が都から落ちて来る途中、共に心肚を吐いて、将来を盟い合ったが、やがて曹操の性行を知って、（この人は、王道に拠って、真に国を憂うる英雄ではない。むしろ国乱をして、いよいよ禍乱へ追い込む覇道の姦雄だ）と怖れをなして、途中の旅籠から彼を見限り、彼を捨てて行方をくらましてしまった旧知であった。」とリマインドされる（「秋雨の頃」）。曹操の故郷まで落ち延びて檄文を書いたくだりと明らかに齟齬を来しているが、これを吉川が設定ミスとして自覚しているのかは判然としない。おそらく吉川は当初陳宮に『演義』とは異なる趣向の役回りを与えようとしていたの

であろうが、その意図を果たせずして、『演義』の既定路線を踏襲する形で陳宮を物語に回収することになったのであろう。[18]

呂布の謀士となった陳宮はであるが、「むずかしやの陳宮」（「花嫁」）、「陳宮は近頃、自分の言が事ごとに容れられないので、おれにすねているふうがあった」、「悲しい哉、わが主君は、死ななければ目の醒めないお人だ」（「奇計」）といった具合に、君臣の信頼関係に間隙が生じてくる様子が差し挟まれつつ、曹操に捕縛されて最期を迎える場面では、陳宮の相反する二つの思いが描出される。一つは、「運命は皮肉を極む。時の経過に従って起るその皮肉な結果を、俳優自身も知らずに演じているのが、人生の舞台である。（略）（――もし、曹操を、そのむかし中牟の関門で助けなどしなかったら、今日の俺も、こんな運命にはなるまいに）と、その眼は、過去の悔みと恨みを、ありありと語っていた。」という一節であり、陳宮が自分の選択した人生の帰結について釈然としない内面が浮かび上がる。もう一つはその直後、曹操から「予を、不義の人物といいながら、しからばなぜ、呂布のような、暴逆の臣を扶けて、その禄を喰んできたか」と罵られると、「いかにも呂布は暗愚で粗暴の大将にちがいない。しかし彼には汝よりも多分に善性がある。正直さがある。すくなくも、汝のごとく、酷薄で詐言（いつわり）が多く、自己の才謀に慢じて、遂には、上をも犯すような奸雄では絶対にない」と傲然と言い放つくだりである（「白門楼始末」）。後者のセリフは『演義』第十九回にも同様の内容が見える。咀嚼しきれない相反するふたつの想いは、吉川自身にとっても未解決の問題であっただろう。吉川がその矛盾を当初から描こうとしていたのか、あるいは執筆の過程において、陳宮の人物像を煮詰めきれなかったがゆえの結末であるのかについては論断できない。しかし、曹操のもとを離れた場面における設定ミスとも思われる展開に鑑みると、吉川も自らが再構築しようとした陳宮像を消化しきれぬまま物語から退場させることになったのではないかと推測される。未解決の構想は、陳宮斬首の場面に抒情となって表出される。「曹操は、階上の廊に立ち上がって、しきりと涙を流していた。（略）陳宮は、死の莚にすわって、黙然と首をのべていたが、ふと、薄曇りの空を啼き渡る二、三羽の鴻の影に面をあげて、静かに、刑吏の戟を振り向き、「もう、よろしいか」と、あべこべに促した。一閃の刑刀は下った。頸骨が戛と鳴って、噴血の下、首は四尺も飛んだ。」陳宮に対して何らかの想いが、吉川にはあったであろう。吉川『三国志』が果たせなかった陳宮像の再構築は、課題として、あるいは創造の余地とし

て、以後の作家たちに委ねられることになる。

（二）柴田錬三郎『三国志 英雄ここにあり』の陳宮像

柴田錬三郎（一九一七～七八）には、「三国志」に取材した長編小説として『三国志 英雄ここにあり』（一九六六～六八）、『英雄 生きるべきか死すべきか』（一九七四～七六）がある。

「柴錬三国志」は基本的には『演義』準拠の作品である。中牟県での逃亡から呂伯奢一家殺害を経て、不仁であるとして陳宮に見捨てられた曹操は「おれからはなれ去ったのは、将来大将軍に立身するのを放棄したことになるのだぞ、陳宮！」と嘯いている（「遁走行」「逃亡者陳宮」「挙兵十七鎮」）。その後、陳宮は張邈と組み、呂布を招き入れて兗州と濮陽を奪わせるが（「徐州太守」）、陳宮の献策を用いぬ呂布は次第に窮地に陥ってゆく。陳宮は呂布に仕えることの空しさに暗然とするが、謀士の地位を捨て去れない。最期は打ち据えられたために「痴呆」のようになった呂布とても曹操の前に引き据えられ、「呂布は志操高潔にはあらざる者乍ら、汝のごとき、詐術多くして、下を欺き、上を犯すがごとき奸雄にはあらず」と曹操に薄ら笑いを見せながら斬首された（「呂布悲惨」）。吉川『三国志』が陳宮に何らかの新たな存在意義を与えようとした形跡が見えるのに対して、「柴錬三国志」の陳宮は、『演義』の陳宮像を継承しており、積極的には創意を加えていない。

（三）陳舜臣『秘本三国志』の陳宮像

陳舜臣（一九二四～二〇一五）の『秘本三国志』（一九七四～七七）は、『演義』等の既成の物語に依存せず、正史準拠で新たな「三国志」を再構築した作品である。道教の五斗米道や仏教からの民衆目線で社会を描いている点において画期的な作品であり、また、「曹操ほど現実主義に徹した人物は、当代、どこにも見あたらない。冷静に現実をみつめ、利害を計算し尽してから行動する」と張邈に述べさせるほど、曹操の評価が高い点も特徴的である（「天日、ために暗し」）。

『秘本三国志』は『三国志』準拠のため、中牟県で曹操の逃亡を助けるのは陳宮ではなく功曹である（「曹操、東へ帰

る」）。陳宮は曹操の徐州侵攻の場面で留守部隊を預かる部将として登場する。望ましい君主と謀士の関係性について、陳宮自身に「私は力は力、知は知、それぞれ分けるべきだと思います。力はあくまで強くなければなりませんが、それは知によってうごかされるべきものです。知が力を使役し、制御するのです。力が自分でうごいてはならないのです」と語らせており、「覇王を操る。それが陳宮の念願であった。張良が劉邦を助けて天下を取らせたように、自分も英傑を操って、天下に覇を唱えさせたいと願っていた。」と陳宮の志向を明示する（「天日、ために暗し」）。しかし、もとより曹操は陳宮にあやつられるような人物ではない。陳宮は、曹操が「部分的に陳宮の知を採用することはあっても、全面的にとりあげてくれたことはない」ことに不満を募らせる。そして、「これは片思いの現象である。陳宮にしてみれば、曹操が力だけの人物であってくれればよいと願ったのに、そうではなかった。はぐらかされたといえよう。これまた片思いとなった。」として陳宮が曹操のもとから離反して、操りやすい呂布に鞍替えする心的状況を措定する（「片思い崩れ」）。

曹操の観察を借りて、「陳宮などは、問題にならない人物であり」と語らせているところから、陳舜臣の陳宮に対する評価は高くないことが窺われる（「天日、ために暗し」[19]）。処刑される際、陳宮の妻子の面倒を曹操がみることを約束し、「陳宮は呂布とちがって、その最期はきわめて素直であった。」という一文で陳宮の命運は恬淡と尽きる（「片思い崩れ」）。

『秘本三国志』は正史準拠であり、『演義』が陳宮に課した漢王朝への忠義や大義といった理念の軛から逃れられている。そのため陳宮が曹操から呂布へと鞍替えをする理由について、比較的容易に合理的な理由を設定しやすく、『秘本三国志』はその解釈を明瞭に示している。『三国志』や『演義』で突き当たる整合性の欠如は、裏返せば、現代的な再生産の意義を付与できる余地である。『秘本三国志』では高い評価が与えられていない陳宮ではあるが、そうしたサブキャラクターの行動にも目こぼしなく合理的解釈の網を張り巡らせようとするのは、推理小説作家でもある陳舜臣ならではの人物造形であろう。それと同時に、『演義』の物語の範疇から歴史解釈へと踏み出すステップの一つを、陳宮というキャラクターの再構築によっても体現したとも言えるであろう。

（四）三好徹『興亡三国志』の陳宮像

三好徹（一九三一～二〇二一）の『興亡三国志』（一九八七～九七）は、基本的には『演義』の流れに沿って執筆された作品であるが、詩人でもある曹操への共感が示され、また随所に『三国志』を引用しつつ物語を再構築する。

『興亡三国志』では、『演義』とは順序を入れ替えて、呂伯奢事件の後に陳宮が登場して中牟県の逃亡を助ける顚末が描かれている。そして『演義』とは異なり、反董卓連合の際にも陳宮は曹操に臣従している（第十章「群雄会盟」）。曹操が兗州の牧になる際に陳宮が一役買っている点は、『三国志』に拠っている。その時期に曹操に仕えている必要があるため、曹操を見捨てることになる呂伯奢事件には関与していないように順序を入れ替えたのであろう。

曹操の徐州侵攻に際して陳宮は離反する決意をするが、その理由は複合的に構成される。呂伯奢一家殺害、徐州侵攻に加えて、曹操の盟友である鮑信の戦死が、実は曹操自身のもくろみに沿うものだったのではないかという疑念を抱き、曹操が大義に悖る奸雄になってしまうことを陳宮は憂えることになる（第十七章「報讐雪恨」）。鮑信が曹操の思惑によって戦死したのではないかという疑念は三好の創作である。また、曹操を裏切り呂布を兗州に導き入れたことについて、「誰にも話したことはないが、じつは、皆殺し作戦を中止させて曹操の声望に傷がつかないように事態を収拾したかったのだ。ある意味で、それは曹操に対する陳宮の一方的な思いであった。男と男だから、恋とはいえないが、それに似た感情といっていいかもしれない。」としており、これも三好の大胆な創作である（第二十六章「煩悩児」）。これらは陳宮が曹操を裏切る思想的・政治的に十分な合理性を『演義』『三国志』に見出だせず、架空による創作によって補わなければならなかったということでもある。そして「一方的な思い」の一節は、前述の陳舜臣『秘本三国志』の「片思い」を彷彿とさせる。思想的・政治的な理由だけでは処理しきれずに、エモーショナルな領域にも踏み込む動機をも創作して傍証を固めて、合理的な解釈を成立させようとしているという点が両者に共通する。

エモーショナルな理由付けという観点からの解析は、おそらく牽強付会ではない。陳宮が呂布のもとを離れられない理由について、「呂布のもとを去らずにいる自分の心の片隅に、貂蟬がどういう運命をたどるのか、最後まで見とどけたいと

いう思いのあることを陳宮は自覚していた。美しい花もいつの日か散るときがくる。その花びらを掌に受けとめてやれるのは、自分しかいないのではないか……。」という独白がなされる（第二十六章「煩悩児」）。唐突にも思われるこの独白こそ、思想的・政治的な視座のみでは陳宮が呂布のもとにいる理由を説明しきれず、エモーショナルな領域での補塡が求められたことの証左であろう。陳宮離反の理由を筆者の架空による創作と流動的な感情とに依拠させたことについて、これを『三国志』や『演義』の不整合を埋める複合的で斬新な創意とみるか、苦渋の補塡とみるかは、読者によって判断が分かれるところであろう。

こうした錯綜した理由付けの果てに、曹操に敗れて縛についた陳宮に、「呂布のもとに身を寄せた本当のわけは、皆殺し作戦を中止させて、曹操の声望に傷がつかないようにしたかったからだった。だが、この期に及んで口には出せなかった。いえば、見苦しい言いわけと受けとられるであろう。」と述懐させ、呂布への仕官は曹操を守るための苦肉の策であったことが再度確認される（第三十章「許田の狩」）。本来であればこの述懐のみでも良いところに、様々な理由が付されたのは、三好の陳宮への思い入れの強さと、合理性の担保が不十分であることへの不安とがなさせたものであろう。

また、『興亡三国志』には、陳宮の義弟なる鄭欽という人物が登場する。鄭欽は『三国志』にも『演義』にも登場しない『興亡三国志』が創造した架空の人物である。鄭欽は登場早々に、曹操に対して、漢室のために戦うのか、それとも天下万民のために戦うのかという「易姓革命」に関わるとも言える重大な問いかけをなす（第九章「曹操起つ」）。それは為政者としてのあり方への問いを発するキャラクターとして造形されていることを意味しており、ジャーナリストとして政治家の評伝を数多く手がけた三好徹ならではの重要な立ち位置を与えられていることが登場時において示されている。鄭欽は曹操を評して、「非情にして有情です。悪鬼のような武人ぶりを発揮したかと思うと、一転して次の日には、憂愁の詩をつくる。人は誰しも多少は矛盾したものをもっているものですが、彼の場合は特別だし、あるいは稀有といってもいいかもしれません」と述べており、曹操の合理性と多面的な内面を現代的視点から照射する役割を担わされている（第十七章「報讐雪恨」）。そうした重要な役回りが与えられるキャラクターが陳宮の義弟という設定であるのは、三好が高く評価する曹操を描

写するにあたり、陳宮という存在が特別な立ち位置にあったことの証左でもある。

鄭欽は、陳宮が離反した後も謀臣として曹操に仕え続け、群臣とは異なる卓見をしばしば披露する。しかし、次第に影が薄くなり、曹操の死とともにフェイドアウトするかのように物語から姿を消してしまう。陳宮が物語から退場した後、本来であれば、鄭欽によって陳宮とは異なる側面から曹操の輪郭を浮き彫りにさせる構想だったのではないかと推測されるが、結果的に鄭欽の存在感は宙に浮いた形で失われてしまった感があることは否めない。それは、陳宮を現代の合理的な解釈のもとで物語に組み込むことの難しさが、それに付随して設定された鄭欽という架空のキャラクターにも波及した結果であると言えるかも知れない。

（五）北方謙三『三国志』の陳宮像

北方謙三（一九四七～）の『三国志』（一九九六～九八）は、正史準拠を標榜している。[20] しかし実際には、関羽の青龍偃月刀や呂布の方天戟等の『演義』に拠るアイテムや設定が見られ、また正史準拠というにはあまりにも自由で破天荒な設定やキャラクターが横溢していることから、正史準拠というよりは、『演義』準拠ではない、という方が正確であろう。

北方『三国志』の中牟県のくだりには、県令も陳宮も登場しない。陳宮が登場するのは、曹操が兗州で黄巾賊との死闘を繰り広げる場面である。「東武陽の陳宮が、意外な商才を発揮して、馬から武器まで集めてくるのだ。兵糧も、さらに増えているのだという。」と紹介され（「降旗」）、以後も商才に長けた実務家の文官として曹操に重宝される役回りを与えられている。

曹操への裏切りについては、「陳宮は、なぜ裏切ったのか。その才は、これからもっと役に立つと、曹操ははっきり認めていた。それを言外に伝えるような、仕事も与えてきた。それが流浪していた呂布を招き入れたというのだ。張邈の反逆より、ずっとわかりにくかった。自分と呂布を較べ、呂布を主に選んだということなのか。」として、陳宮の行動の不合理性を明示している。そのうえで、曹操を裏切った理由を呂布に問われた陳宮は、「曹操は、政事までわが手でなそうという野

心を持っています。万能の王たらんと、望んでいるのです」「平定をする力と、政事をなす力とは、別なものでなければならないのです。」とこたえる。軍事のみに興味を示し、政治には関与しないという呂布こそが、陳宮にとっては理想の君主であり、もし呂布が政治にも関心を示すようになれば、「やはり私は裏切るだろうと思います」とまで言わしめて、これを「陳宮の夢」と称している（「黒きけもの」）。君主には軍事的な牽引力を発揮させ、自身は謀士として政治を執るという「陳宮の夢」は、陳舜臣『秘本三国志』の陳宮が求めたものと相似である。陳宮の造反について、三好『興亡三国志』が「片思い」という表現でエモーショナルな動機に踏み込んだ点と、北方『三国志』が軍事と政治の分業という視点から陳宮が君主を鞍替えしたという解釈は、いずれも陳舜臣『秘本三国志』と通底するところがある。これらは直接的に『秘本三国志』の影響を蒙ったというよりも、陳舜臣が『演義』を離れて正史と向き合うことによって示し得た現代的な解釈の方向性が、妥当性を有するものであったことの証左たり得るであろう。

北方『三国志』では、陳宮はスケールの小さな実務家として描かれており、劉備陣営との接見においては卑屈な愛想笑いを浮かべる様子が描出される。麋竺の言葉を借りて、「野心を捨てきれない男です。いや、野心に振り回されている、と申してもよいでしょう。」「陳宮には、自分より優れた大将は必要ないのです。王佐の才とも、また違います。天下に立ちたい。しかし、どこか自信に欠ける。それで、御しやすい武将と組もうとする、ということでしょう。」と評し、さらには呂布によって陳宮の人生が損なわれたのではなく、むしろ呂布が陳宮によって「稀代の将軍」になり損なったことを惜しんでいる（「流浪果てなき」）。また、呂布が陳宮に「天下を取れるぞ」と言ったつもりだったが、陳宮はそばにはおらず、「この騎馬隊の動きに、陳宮の馬で付いてくるのは無理だろう。呂布は苦笑し、赤兎の腹をさらに股で締めあげた。」という一節がある（「光の矢」）。北方は、最も思い入れのある人物は誰かと問われた際に呂布と答えている。[21] 北方『三国志』が呂布の純粋さを賛美し、また馬や騎馬隊への思い入れが非常に強い作品であることに鑑みれば、赤兎馬についていけずに呂布の視界から消えた陳宮には、隠喩というには明確すぎる低評価が与えられていることになる。また、北方『三国志』は「志」という概念をプラットフォームの一つとして登場人物の相関性を形成するが、劉備に「陳宮に、われらの志を語ろうという

気にはならなかった。語っていい人間だと、陳宮のことは思えなかったのだ」と断じられた時点で、陳宮は主役たちの土俵には上れない烙印を押されたのである（「追撃はわれにあり」）。「陳宮という男が嫌いではないのだ」「陳宮を、見捨てるわけにはいかん。返して貰うぞ」という呂布との関係性に一抹の救いはあるが、曹操への内応者に捕縛されて、馬に縛りつけられたまま叫んでいる姿が、陳宮に与えられた最期の描写である（「海鳴りの日」）。後に兵糧の備蓄に窮した曹操が、「兵糧を集めることに関して、あれほどの才覚を持った者は、いまの幕僚の中にはいない。」（「遠い雷鳴」）と述懐する場面があるが、北方『三国志』における陳宮は、天下の政治を執る野心を捨てられぬ、兵糧の調達に長けた実務家に過ぎない。

北方『三国志』の陳宮像は、『三国志』にも『演義』にも直接の論拠を求めないという点においてオリジナルであり、輪郭はぶれていない。軍事と政治を分担するという発想から呂布を君主に選んだという点は陳舜臣『秘本三国志』と共通すると指摘したが、しかし北方『三国志』は造反の理由として感情的な側面には踏み込んではいない。思想的・政治的な理由のみで合理的に処理していることになる。北方は陳宮という人物に対して、吉川英治、三好徹ほどの思い入れが無いがゆえに、ぶれが生じるほど複雑な設定を講ずる必要が無く、合理性が揺るがない範囲内での人物造形が容易であったと言えるであろう。

（六）宮城谷昌光『三国志』の陳宮像

宮城谷昌光（一九四五～）の『三国志』（二〇〇一～一三）は、現代日本の長編小説としての「三国志」受容において、北方『三国志』と双璧をなす作品である。宮城谷『三国志』は正史準拠であり、『演義』的要素は完全に排除されている。[22]

中牟県での顚末では、県令が曹操を釈放している。呂伯奢事件にも触れられるが、陳宮は登場しない（「義挙」）。陳宮の名が見えるのは、兗州の黄巾賊との闘いで劉岱戦死の報が曹操の陣に届く場面である。「剛直烈壮」「海内の名士の多くと交わりを結んだ」という『三国志』呂布伝・裴松之注引魚氏『典略』の一節を引用したうえで、「そうとうに頭の切れる男だ。曹操は陳宮をそう観ている。その怜悧さは大胆さを包含しているので、陳宮の発言にはおもいがけなさがある。」と評

する（「兗州」）。後に張邈にも陳宮を「怜悧すぎる」と評させているところから（「親友」）、宮城谷『三国志』の陳宮評の基調をそこに確認することができよう。また、兗州をおさえるために陳宮が述べた計略について、「大計だな。曹操は胸裡にふるえをおぼえた。」「陳宮の功の大きさは、曹操がもっともよくわかっている。」とする（「兗州」）。宮城谷は「劉備のしている戦いや移動、権謀術数ばかりではつまらない。国の政治にこそ、定着した人間の苦悩があり、喜びがあります。」と述べるように[23]、歴史を描く際に戦争よりも政治を重視するため、勢力基盤を持たなかった曹操を兗州の支配者に押し上げた陳宮の政治的・戦略的な知見と実行力に高い評価を与えている。

曹操の信頼する盟友であった張邈が、陳宮とともに曹操に叛旗を翻す際に、「曹操の何が、どのように恐いのか、うまく説明することができないが、曹操との友情を想うたびに息苦しくなる。そういう張邈の心情は、曹操が恐いのではなく、曹操を裏切るかもしれない自分が恐いということなのであろう。」と説明される（「親友」）。宮城谷は史書と向き合うことによって古典世界の再構築を目指す志向の強い作家であるが、そうでありながらなお、張邈の離反については現代的でエモーショナルな解釈を挟まなければ整合性がつかなかったことが窺われる。そのうえで、「かつて曹操を兗州牧の席にかつぎあげた陳宮の知力のすごみを知っている張邈は、――この男が、曹操を裏切るのか。」「陳宮の信念のようなものが、張邈のうしろめたさと不安を消したといってよい。」と述べ（「三城」）、陳宮の知力と信念という、陳舜臣『秘本三国志』や北方『三国志』とは異なる側面から陳宮の存在感を描出している。

陳宮が曹操を裏切った動機については、徐州の虐殺によって人々の支持を失った曹操にかわり、呂布によって中原を平定させて天子を迎え、漢王朝の復興を果たす、という未来図を思い描いていたとする。呂布に自分の献策を用いられない陳宮は、呂布が天下を統べる器量ではないことを知るが、「それでも陳宮は曹操のもとへもどる気がない。――曹操は、嫌いだ。陳宮のこの嫌悪感は、自分でも説明がつかない。あえていえば、いま曹操が国権をにぎっている図は、かつて宦官どもが天子にはりついて悪政をおこなっている図に似ている。」と考える（「下邳」）。そして曹操は「陳宮の抜群の才器を愛し、背かれても憎むことをしなかった」ために陳宮を救おうとするが、陳宮が拒んだことについて、「ここまでくると陳宮は情念の

人であるようにおもわれる。」と述べ、総括的に、「曹操をこばみつづけた陳宮と、その陳宮を愛しつづけた曹操との関係は、どう表現したらよいのであろうか。利害を越えた何かがあったというほかはない。」と結んでいる（「逐勝」）。

「怜悧」と評された策士に似合わず、陳宮の出処進退の根拠は最終的に「嫌悪感」や「情念」に委ねられている。その点では、前述の張邈が曹操から離反した心情の解釈と同じ位相にある。本稿で対象とした六名の作家のなかでは、史書に基づいた合理性を再現しようとする志向が最も強い宮城谷『三国志』においてすら、「嫌いだ」という感情論に収斂させざるをえなかったことになる。吉川英治以来の作家たちが意欲を見せながらも克服することができなかった、現代的視点による陳宮像の再構築の難しさが、ここにも示されていると言えるだろう。

四、結語

『演義』の序盤、曹操との関係性のもとで重要な立ち位置を占める陳宮は、才覚があり大義を重んじる人物として登場する。それが何故曹操を裏切り、曹操よりも君主としての力量が劣る呂布に仕えて身を滅ぼしてしまったのかという点には、多くの読者が疑問を感じたことであろう。吉川英治『三国志』もおそらく『演義』の陳宮像の齟齬とその重要性を意識しており、『演義』とは異なる設定を施して物語に登場させたが、途中でその意図は潰えて『演義』と同様のキャラクター像に回収されてしまった。柴田錬三郎『三国志 英雄ここにあり』は『演義』路線の継承であり、基本的には陳宮像も『演義』を踏襲している。『演義』からの完全な脱却を果たした陳舜臣『秘本三国志』は、謀臣として政治的才幹を発揮したいという欲求から、陳宮は曹操ではなく呂布を選んだと解釈した。そこに、陳宮の曹操への「片思い」という感情面での関係性をも補塡することにより、陳舜臣は吉川『三国志』が果たせなかった現代的な合理性の付与による陳宮像の再構築をひとまず果たしたと言えるだろう。

しかし、その後リライトされた作品群でも、陳宮像は試行錯誤を重ねる。三好徹『興亡三国志』は、曹操が盟友・鮑信の死を望んでいたのではないかという疑念に加えて、徐州侵攻の蛮行を諫めて曹操の声望を傷つけないようにするため、陳宮

は敢えて呂布に寝返った、という設定を付した。ここでは陳宮の裏切りの理由はいずれも架空の設定に依拠している。さらに思想的・政治的な理由付けだけでは陳宮の裏切りの正当性が担保できない感があったのであろう、陳舜臣と同様に曹操への「片思い」というエモーショナルな表現を用いつつ、情念的な動機が次々と付加されてゆく。北方謙三『三国志』では、君主には軍事を担当させて陳宮は謀士として政治を執りたい、という欲求から、陳宮は曹操ではなく呂布を選ぶ。これも陳舜臣と同様の発想である。宮城谷昌光『三国志』は、陳宮の「怜悧」な知力・政治力を高く評価するが、しかし最終的には説明のつかない「嫌悪感」「情念」によって陳宮は曹操ではなく呂布への臣従を貫き、身を滅ぼしてゆく。宮城谷『三国志』は、厳格な正史準拠であることによって、かえって妥当性のある離反の理由を帰納的に抽出することができず、最終的に感情論に強く依拠することになった。

政治と軍事の分割担当という発想と、曹操との感情面での関係性という二つの側面から理由付けを想定した点は陳舜臣の創意であり、はからずも三好、北方、宮城谷の三氏がその路線上で陳宮像の再構築を図ったことになる。キャラクター像を再構築する際には、まず思想的・政治的な合理性を想定し、それで妥当性を担保できない場合には感情面からの理由付けをする、という重層的な陳舜臣の手法の実効性が示されたと言えるであろう。思想的・政治的側面を狭義の合理性とすれば、そうしたロジックでは処理しきれない感情面に踏み込むことは広義における現代的な合理性の付与と言えるであろう。

現代的視点から見たときに浮かび上がる先行作品の合理性の陥穽は、往々にして新たな翻案創作の意欲の淵源となる。長編小説という限られた分野のサブキャラクターの一人にすぎない陳宮像であっても、現代において再構築するにあたり、そこに注がれる創意と苦心の痕跡は顕著である。「三国志」をめぐるコンテンツは、『演義』『正史』という確固たる古典的「聖典」を有するがゆえに、常に各時代の合理性で補塡し続けようという欲求が刺激されてきた。次々と新たに覆い被さってくる「現代」において、先行作品への疑問や各時代の合理性の限界による不備は常に発見され続け、それが已むことなき新たな再生産へと導く原動力の一つとなり続けることであろう。

注

(1) 世語曰：岱既死，陳宮謂太祖曰：「州今無主，而王命斷絶，宮請説州中，明府尋往牧之，資之以收天下，此霸王之業也。」宮説別駕、治中曰：「今天下分裂而州無主；曹東郡，命世之才也，若迎以牧州，必寧生民。」鮑信等亦謂之然。（『三国志』武帝紀・裴松之注引『世語』）以下、『三国志』の引用は中華書局本による。

(2) 渡邉義浩『三国政権の構造と「名士」』（汲古書院、二〇〇四年）、二九一頁、参照。

(3) 渡邉義浩氏は、辺譲殺害による陳宮の反乱を「曹操最大の危機」と評している。（吉川英治『三国志（三）』巻末「もっと知りたい三国志（三）曹操の革新性」新潮文庫、二〇一三年、四五七頁）

(4) 布問性，言「萌受袁術謀。」「謀者悉誰？」性言「陳宮同謀。」時宮在坐上，面赤，傍人悉覺之。布以宮大將，不問也。（『三国志』呂布伝・裴松之注引『英雄記』）なお、黄巾イレギュラーズ編『出身地でわかる三国志の法則』（KOEI、一九九五年、一五〇～一五二頁）は、郝萌の反乱について、郝萌が河内の出身であり、また陳宮は兗州出身である点に着目して、呂布軍は幷州出身者による同郷意識が強く、そこから生じる排他的性格によって幷州以外の出身者が共謀して反逆したと指摘する。

(5) 『三国演義』（毛宗崗本）の引用は、上海古籍出版社『三国演義（上・下）』（一九八九年）に拠り、北京大学出版社『三国演義会評本（上・下）』（中国古典小説戯曲研究資料叢書、一九八六年）も参照した。

(6) 寧教我負天下人，休教天下人負我。（『演義』第四回）なお、『三国志』武帝紀・裴松之注引孫盛『雑記』は「寧我負人，毋人負我」と記す。

(7) 我爲國家，跟他到此，殺之不義。不若棄而他往。（『演義』第五回）なお、京劇・滇劇・晋劇・漢劇等、多くの地方劇で「曹操を捉える」が演じられている旨、李殿元・李紹先『三国志考証学』（和田武司・訳、講談社、一九九六年）、三七～三八頁に見える。

(8) 公昔棄我而去，今有何面目，復來相見？（『演義』第十回）

(9) 『三国志平話』は、国会公文書館デジタルアーカイブ『至治新刊全相平話三国志』（https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0503000000/0000000810/01、二〇二二年一一月二〇日閲覧）、及び鍾兆華『元刊全相平話五種校注』巴蜀書社、一九八九年、参照。なお、曹操が陳宮の妻子を保護したことについて、高島俊男氏は、「胡三省（『通鑑』の注釈者）は、「きっと陳宮の妻子は何もできないという確証があったのだろう」と身も蓋もないようなことを言っている。」と述べる。（『三国志 きらめく群像』ちくま文庫、二〇〇〇年、一一〇頁）また、石井仁氏は「曹操は陳宮の遺族を手あつく保護し、父親がわり

になって、その娘をとつがせたという。義兄弟の関係でも結んでいたのだろうか。史書は何も伝えない。」と述べる。（『曹操魏の武帝』二〇〇〇年、新人物往来社、一四六頁）

(10) 出闕，過中牟，爲亭長所疑，執詣縣，邑中或竊識之，爲請得解。（『三国志』武帝紀）

(11) 時掾亦已被卓書：唯功曹心知是太祖，以世方亂，不宜拘天下雄儁，因白令釋之。（『三国志』武帝紀・裴松之注引『世語』）

(12) 石井仁『曹操　魏の武帝』（新人物往来社、二〇〇〇年）、七七頁、参照。『三国志』呂布伝・裴松之注引魚氏『典略』は「陳宮字公台、東郡人也。」と記す。

(13) 剛直烈壯，少與海内知名之士皆相連結。（『三国志』呂布伝・裴松之注引魚氏『典略』）

(14) 呂布のキャラクターについては、柴田『英雄ここにあり』では「呂布は、もともと、女色耽溺の人ではなかった」（「眼球をくらう」）としており、北方『三国志』や宮城谷『三国志』でも、従来の無思慮・無節操な猛将とは異なるイメージでの人物像を提示している。テレビドラマ『三国志　Three Kingdoms』でも新たな呂布像が示されており、サブカルチャー領域におけるキャラクター像の改変は旺盛になされている。

(15) 陳宮不隨曹操，可謂知人；然後來却隨呂布，則猶未爲知人也。（『演義』第五回、毛宗崗評）

(16) ウィキペディア「陳宮」は、「史実上の彼の行動には不明な点が多く、各創作物では知謀に長けた策士という人物像を基調とし、様々な陳宮像が描かれている」と指摘する。（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%99%B3%E5%AE%AE#cite_note-ryofuhon-4、二〇二二年一一月一九日閲覧）

(17) 日本における「三国志」受容、及び吉川英治『三国志』については、雑喉潤『三国志と日本人』（講談社現代新書、二〇〇二年）、田中尚子『三国志享受史論考』（汲古書院、二〇〇七年）、武内真彦「泣かずに魏延を焼き殺す　吉川英治の読んだ三国志」（『アジア遊学』No.105、二〇〇七年一二月）、『僕らの三国志大全』（綜合図書、二〇一三年）、袴田郁一「吉川英治『三国志』の原書とその文学性―近代日本における「三国志」の受容と展開」（『三国志研究』第八号、二〇一三年九月）、長尾直茂『本邦における三国志演義受容の諸相』（勉誠出版、二〇一九年）、箱崎みどり『愛と欲望の三国志』（講談社現代新書、二〇一九年）等、参照。なお、本稿の各小説作品の引用は、吉川英治『三国志』（講談社吉川英治文庫、一九七五年）、柴田錬三郎『三国志 英雄ここにあり』（講談社文庫、一九七五年）、陳舜臣『秘本三国志』（新潮文庫、一九八二年）、三好徹『興亡三国志』（集英社文庫、二〇一五～一六年改訂新版）、北方謙三『三国志』（ハルキ文庫、二〇〇一～〇二年）、宮城谷昌光『三国志』（二〇〇八～一五年）に拠る。

(18) 上永哲矢氏は、「吉川英治は、当初陳宮に原作以上の重要な役回りを与えるつもりが、途中でつじつまが合わなくなると思いなおし「演義」の展開通りに話を戻したのだろうか。陳宮が曹操軍を離脱するくだりがなく、設定ミスで処理されたのは返す返すも惜しいかぎりだ。」と指摘する。(「英雄である曹操を、共犯者の陳宮はどこで見限った!?」(「歴史人(ここからはじめる!三国志入門第27回)」、https://www.rekishijin.com/12160、二〇二二年一一月一九日閲覧)

(19) 陳舜臣『曹操 魏の曹一族』にも陳宮は登場するが、曹操に叛旗を翻し、呂布とともに殺されたことが記されているのみで、能力や性格については触れられていない。

(20) 拙論「現代日本の「三国志」受容における二つのリアリティー――北方謙三と宮城谷昌光の両極性――」(『藝文研究』第一一六号、二〇一九年六月)、参照。

(21) 北方謙三監修『三国志読本 北方三国志別巻』(ハルキ文庫、二〇〇二年)、六七頁、参照。

(22) 注20前掲拙論、参照。

(23) 宮城谷昌光『三国志読本』(文春文庫、二〇一七年)、八〇頁、参照。